

poem 2

by aono

photo by mimusan



厳しい寒さを耐えることができる者だけが

険しい山を登ることができる者だけが

疲れた体を励ましながら歩く者だけが

美しい風景を見る事を切望する者だけが

ひたすら樹に咲く氷の花を求める者だけが

身をおくことの出来る世界

透明で冷たい世界

樹氷はそんな無垢な思いへの天からの贈り物



あなたのその肌は

触れると壊れてしまいそう

それでも そっと触れてみたい

そんな強い衝動をぐっと抑える

もしも薄い氷のようにすっと溶けてなくなってしまうたら

もしも薄いガラスのようにパラパラと砕けてしまったら

一生後悔するに違いないから



春が近づいている

やわらかい光が白鳥にそそぐ

まだ 湖の水は冷たい

氷の溶けた湖面に 白鳥は集う

春を歓迎し、行く冬を懐かしむ

そして 旅立つ日を待ちながら

冬を過ごした湖に別れをつけるように

最北へ向かう旅の無事を祈るように

優雅に舞う



ピンクの頭を持ち上げひっそりとたつ

その気高い姿を求め 多くの者たちが彷徨い歩く

運良くあなたに出会えると

その儂き姿に息をのむ

けれどもあなたは ただうつむいて

周りの者には目もくれない

そんなあなたに強く惹かれ

あなたを蹂躞するものがないように

ただそれだけを思う

私もそんな彷徨い人のひとり



君の瞳は星のように輝き

天使のまなざしを思わせる

僕はその瞳に魅せられて 毎日君のもとに通う

いつも控えめな君の瞳に気づく者は少ない

星の輝きと天使のまなざしを知る者は少ない

僕は限られた幸運を手にし 毎日君のもとに通う

君を侮辱する者を決して許しはしない

天使の瞳を持つ君を 僕は守りたい

誰か来ないかな



さっきからずっとここで待っているのに

誰も来ない

雪の上で足が冷たくなるほど待っているのに

誰も来ない

おーい 誰かいないか？

仕方ない あっちの木へ移ってみるか

そろそろ春だよー

木の芽も出てきたよー

一緒に遊ぼうよー

さっきからずっと叫んでいるのに

誰も来ない

みんな どこにいるんだろう

辿る



新雪に足跡を誰がつけたのか

辿って行けば

白い世界の そのまた先へと続く

全てのもものが飲み込まれる洞へと続く

全てのもものが落ちていく洞の先は

異形の者が住む別世界

二度とは戻れない異世界で

足跡の主は何をしているのだろう

雪はともだち



こうやって首を出して見ても

あるものは 雪 雪 雪

みんなどこへ行ったんだろう

寒がりが多くて まだ出てこないんだろうか

ぼくは元気！ 元気！

雪はぼくの友達さ

みんな 寒がってないで 出ておいで

雪はこんなにふかふかで気持ちいい

一緒に雪でかくれんぼしよう



「ようこそ ぼくの木へ」

「ぼくの木？ ここは貴方の木なの？」

「そうですね ぼくの縄張りです」

「あきれて声も出ないわ」

「最初に見つけたのはぼくですから ぼくの木なんです」

「そういうのを 屁理屈といいます」

「貴女のような淑女には 屁理屈などという汚い言葉は似合いませんよ さあ とにかくにも
こちらへどうぞ」

「よけいな世話よ 私は好きな時に好きな木にとまります！」



空を夜に明け渡す前に

月に舞台を譲る前に

今日のステージを終える前に

太陽のフィナーレが始まる

その日の終幕にふさわしく

華やかな色彩が空を覆う

それは明日への期待と希望の色

素晴らしいフィナーレの残照を残し

太陽の出番は終わる